



宮城県における斑点米カメムシ類の 県全域調査

宮城県古川農業試験場 作物保護部 おお え たか ほ
大 江 高 穂

はじめに

斑点米とは、カメムシ類がイネの籾を吸汁することによって表面に黒色の斑点が生じた玄米のことである。農産物規格規定では、着色粒の混入率が0.1%を超えると2等、0.3%を超えると3等に格付けされる。玄米の農産物検査において、斑点米は着色粒として扱われるため、斑点米の混入はたとえ少量であっても品質低下の要因となる。こうした斑点米の原因となるカメムシ類は現在65種いることが判明しており、これらは総称して斑点米カメムシ類と呼ばれている（友国ら、1993）。

宮城県で斑点米被害が初めて問題となったのは1970年代初頭であり、その原因種を明らかにするため1974～77年に水田とその周辺におけるカメムシ類の生息実態調査が県全域で実施された（藤崎、1982）。この調査によって5科27種の斑点米カメムシ類が確認され、このうちオオトゲシラホシカメムシ *Eysarcoris lewisi*、ホソハリカメムシ *Cletus punctiger*、クモヘリカメムシ *Leptocoris chinensis*、コバネヒョウタンナガカメムシ *Togo hemipterus*、アカヒゲホソミドリカスミカメ *Trigonotylus caelestialium* の5種が主要種とされた。

その後、1983年に県北部でアカスジカスミカメ *Stenotus rubrovittatus* の加害が原因とみられる斑点米被害が多発し（高橋ら、1985）、被害発生地域や発生種が従来と異なっていたことから、1987、88、91年に2回目の県全域調査が実施された（永野ら、1992）。この調査によって5科25種の斑点米カメムシ類が確認され、このうちアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、フタトゲムギカスミカメ *Stenodema calcarata*、ホソハリカメムシの4種を主要種とし、種構成割合と発生地点率のいずれも最も高かったアカスジカスミカメが最重要種と位置づけられた。

この調査以降、宮城県ではアカスジカスミカメについ

て発生生態の解明や防除対策等数多くの技術開発が進められてきた。しかし、斑点米の混入による落等割合は近年3～4%前後で推移しており（田淵ら、2015）、被害は横ばいの状況が続いている。宮城県で斑点米被害に収束の兆しがみられない要因として、加害種の変化やそれに伴う防除適期の変化等が関与しているとしたら、これまで行ってきたアカスジカスミカメを対象とした防除対策を見直す必要がある。斑点米カメムシ類の発生状況については、宮城県病害虫防除所が毎年実施している発生予察調査によって把握してきたが、調査場所の主体は水田である。そのため、雑草地や牧草地等の発生源では前述の2回目の調査報告以降、本格的な調査は行われておらず、発生実態は十分に把握できていない。

そこで、2014～16年に宮城県内に生息する斑点米カメムシ類の発生種の変化や地域間差を明らかにすることを目的に、関係機関の協力を得て県全域の発生源におけるすくい取り調査を行い、現在の発生種や地域による主要種の違いについて明らかにしたので報告する。なお、本内容の一部は報告済みである（大江ら、2018b）。

I 発生種の変遷

—1970年代から2010年代にかけて—

宮城県における発生種の変化を明らかにするため、2014～16年の7月1日～31日に、県内全域を対象に水田周辺の発生源においてすくい取り調査を実施した。古川農業試験場が実施した調査（以後、独自調査）では捕獲した斑点米カメムシ類成虫をすべて同定した。調査地点については図-1に示した。図-1に示された地域調査、発生予察調査の結果については後述する。

独自調査178地点で捕獲した9,724頭のカメムシ類成虫を同定した結果、10科24種の斑点米カメムシ類が確認された。また、種別の発生地点率（発生が確認された地点数/調査地点数×100）と種構成割合（各種の捕獲数/全種の捕獲数×100）を算出して、藤崎（1982）および永野ら（1992）による過去のデータと比較したものを表-1に示した。

種構成割合が高い順に示すと今回調査した2014～16

Field Surveys of Rice Stink Bugs in Miyagi Prefecture. By Takaho OE

（キーワード：水稲害虫、斑点米カメムシ類、アカスジカスミカメ、主要種）